

## 自己評定に要する反応時間と自尊感情との関係

西岡美和

**要旨：**自尊感情と自己関連情報処理との関係について、自己評定に要する反応時間を用いて検討する。評価が明確である肯定語と否定語、評価がはっきりしないあいまい語を用いて、「漢字が含まれているか（形態判断）」と「自分に当てはまる（自己関連判断）」について、「yes」「no」判断と判断に要する反応時間を測定した。自己関連判断の反応時間について、自尊感情×関連の有無（「yes」「no」）×刺激語の評価の3要因分散分析をおこなったところ、関連の有無の主効果と刺激語の評価の主効果が有意であった。また、2次の交互作用が有意傾向であり、下位検定を行ったところ、①自尊感情の高い者は肯定的な特性語に対する「no」反応で低い者より遅く、「no」反応の方が「yes」反応より時間がかかること、②自尊感情の高い者の「yes」反応は肯定的な特性の方が速いが、「no」反応では特性語の評価によって変わらず、自尊感情の低い者は「no」反応で肯定的な特性の方が速く反応すること、がわかった。肯定語に対する「no」反応が否定語に対する反応と同程度の時間を要していたことから、自尊感情の高い者にとって、肯定的な特性に当てはまっていないとする判断には、否定的な情動を喚起させる要素が含まれると考えられる。

自尊感情は自己に対する評価をもとにした感情とされている。自尊感情などの自己価値についての判断は、自己に対する感情を基にしており、学習を通して情動的な反応と連合した自己概念の検索、情動反応に影響する記述的な自己知識の想起、一時的な情動の評価によって判断される（Wyer, Clore, & Isbell, 1999）。Campbell & Lavelle（1989）は、自尊感情を自己スキーマの評価の要素、自己概念を自己スキーマの知識的側面として区別した。しかし、このように自己スキーマの評価の要素として自尊感情を捉え、知識的側面としての自己概念との関係から位置づけて、内在化された自己表象を基にした評価感情であるという考えかたに疑問を提唱する動きもある（遠藤, 1999）。

遠藤（1999）は、これまでの自尊感情に関する研究の問題点を挙げ、自尊感情の高さは望ましい行動特徴と関係しているとされているが、因果関係は曖昧であることを指摘している。Brown, Dutton, & Cook（2001）は、望ましさがあいまいな語を用いて、「望ましい特性を表す」あるいは「望ましくない特性を表す」と教示して自己に当てはまる程度を評定させた。同じ特性語でも、自尊感情の高い者は否定的な気分の人に、「望ましくない特性を表す」とされた場合より、「望ましい特性を表す」とされた場合の方が当てはまるとした。このように同じ特性語でもあっても、

特性の望ましさによって自己評定が異なることがある。自尊感情の高い者の自己概念はその内容が肯定的であるとされているが（Campbell & Lavelle, 1989）、安定した自己表象としての自己概念の望ましさを表すというよりも、自己に関する情報の評価に対する反応傾向を反映しているとも考えられる。しかし、自尊感情を個人の内的な特性や資質の表れと捉えた研究では、このような自己概念の内容の違いが、どのような情報処理過程と関係しているのかについては、あまり注目されてこなかった。本研究では、自尊感情による自己関連情報の処理への影響について検討する。

自己に関する情報処理過程を探る方法として、自己評定に要する反応時間がある。自己評定に要する反応時間と自尊感情との関係では、自尊感情の低い者の自己概念の不確かさの指標として用いられ、自尊感情の低い者は自分に当てはまるかどうかの判断に要する反応時間が長いとしている（Campbell, 1990; Baumgardner, 1990）。しかし、これらの研究では、主に肯定的、あるいは否定的な性格特性語を使用しており、特性語の評価による影響で判断が遅れたとも考えられる。自尊感情の高い者が肯定的な形容詞を支持し、否定的な形容詞を否定するのに対して、低い者は中程度あるいは肯定否定に関わらず支持したり否定したりしている（Campbell & Fehr, 1990）。自尊感情の

低い者は自己を極端に肯定的あるいは否定的に評価することに抵抗があり、そのため、肯定的な特性や否定的な特性を用いた自己評定では反応時間が遅れた可能性がある。

そこで、本研究では評価が肯定的にも否定的にも偏っていない、中程度の語（以下、あいまい語とする）を用いて、自尊感情の高低による自己評定に要する反応時間の差について検討し、自己認知の特長について考察する。

Wyer, et. al. (1999) は、特性判断の過程として、特性の解釈という記述的な基準に基づく過程と、情動的な反応を特性語に変換するという情動的な基準に基づく過程があるとしている。自己評定の対象となる特性語が評価的であった場合、特性語の概念や特性と関係する自身の過去の経験の想起といった記述的な基準よりも、自己に対する感情を特性語の評価に転移させるといった情動的な基準が働きやすい。一方、評価が肯定的にも否定的にも偏っていないあいまい語に対する反応では、自己に対する感情を特性語の評価に転移させることが難しく、記述的な基準による差が見られると考えられる。従って、評価が肯定的あるいは否定的な特性語に対する反応時間には、情動的な基準による処理過程が反映されやすく、評価があいまいな特性語に対する反応時間には、記述的な基準による処理過程が反映されやすいと考えられる。評価の種類だけでなく、明確さが異なる特性語を用いることで、自尊感情が特性語の自己評定の反応時間に対して、情動的な基準による処理過程で影響しているのか、記述的な処理過程で影響しているのかを探ることができるだろう。肯定語や否定語で自尊感情による差が見られるのであれば、自尊感情は情動的な基準による処理過程で自己評定に影響し、あいまい語で自尊感情に差が見られるのであれば記述的な基準による処理過程で影響すると考えられる。

## 方 法

**実験参加者** 女子大学生 51 名であった。

**質問紙** Rosenberg (1965) の self-esteem scale (訳：星野, 1972) について、自分に当てはまるかどうかについて「とてもあてまる」~「全く当てはまらない」まで 4 件法で回答させた。

**実験刺激** 伊藤 (1998) と青木 (1970) から、それぞれ、実験試行用に、肯定語 16 語、否定語 16 語、あいまい語 16 語ずつ 48 語を 2 セットで合計 96 語と、練

習試行用に 4 語、フィルター試行用に 6 語（肯定否定の評価が中点に近い語を 10 語）を選択した。48 語については、自己関連判断課題 (30 語)「呈示された語が自分に当てはまるかどうか」と形態判断課題 (18 語)「呈示された語に漢字が含まれているかどうか」を行った。

**手続き** self-esteem scale への回答後、実験を実施した。実験の教示、及び実験試行は全て CRT に呈示して行った。教示では、「あまり考え込まずに、できるだけ速く、かつ正確に回答するように」に求めた。教示の呈示後、練習を 4 試行行い、手順を理解できたかどうか確認し、本試行に移った。本試行では、フィルター試行 3 試行、実験試行 48 試行、フィルター試行 3 試行の順で行った。実験試行では、自己関連判断と形態判断をランダムに呈示した。反応は全て、「はい (以下, yes)」と「いいえ (以下, no)」の 2 件法で求めた。

## 結 果

### 自尊感情尺度

self-esteem scale について「とても当てはまる」を 4 点~「全く当てはまらない」と 1 点として得点化を行い、合計を自尊感情得点とした。平均値は 23.51, SD は 4.09 であった。このうち、上位下位約 1/3 ずつを高自尊感情群 (16 名, 得点範囲; 26~31)、低自尊感情群 (16 名, 得点範囲; 12~22) とした。

### 反応時間

形態判断課題の反応「yes」「no」の反応から、誤反応が 18 語中 1/3 以上にあたる 7 問あった 2 名を分析対象から除外した。また、自己関連判断課題で、肯定語、否定語、あいまい語のいずれかで 10 語全て当てはまるとした 6 名も、当てはまる語と当てはまらない語の比較ができないことから分析対象から除外した。上記の高自尊感情群 16 名、低自尊感情群 16 名は、これら 8 名を除いた後に決定した。

次に、自己関連判断課題と形態判断課題の反応時間を求め、log 変換を行った (以降は、変換した値を反応時間とする)。表 1 に平均値と標準偏差を示す。

形態判断課題の反応時間について、自尊感情の高低と刺激語の評価 (肯定語、否定語、あいまい語) を要因とする 2×3 の 2 要因分散分析を行ったところ、自尊感情の主効果、交互作用は有意でなかったが、刺激語の主効果が有意であった ( $F(2,60) = 3.56, p < .05$ )。多重比較を行ったところ、肯定語やあいまい語に対す

表1 自尊感情高低による、刺激語の評価別の形態判断の反応時間 (log 変換後)

|        | 肯定語          | あいまい語        | 否定語          |
|--------|--------------|--------------|--------------|
| 低自尊感情群 | 3.08<br>0.14 | 3.08<br>0.14 | 3.07<br>0.17 |
| 高自尊感情群 | 3.10<br>0.13 | 3.12<br>0.13 | 3.08<br>0.09 |

上段；平均値 下段；SD

表2 自尊感情高低による、刺激語の評価別の自己関連判断の「yes」反応と「no」反応の反応時間 (log 変換後)

|        | yes 反応       |              |              | no 反応        |              |              |
|--------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
|        | 肯定語          | あいまい語        | 否定語          | 肯定語          | あいまい語        | 否定語          |
| 低自尊感情群 | 3.22<br>0.13 | 3.21<br>0.14 | 3.26<br>0.10 | 3.22<br>0.12 | 3.25<br>0.14 | 3.27<br>0.12 |
| 高自尊感情群 | 3.22<br>0.08 | 3.24<br>0.06 | 3.28<br>0.10 | 3.28<br>0.14 | 3.28<br>0.11 | 3.27<br>0.07 |

上段；平均値 下段；SD

る反応時間が、否定語に対する反応時間よりも長かった。自尊感情の高低による差は見られなかった。

次に自己関連判断の反応時間について、「yes」反応と「no」反応の反応時間を、刺激語の評価ごとに平均値を算出した (表2)。反応時間の平均値について、自尊感情の高低、刺激語の評価、関連の有無 (「yes」反応、「no」反応) を要因とする  $2 \times 3 \times 2$  の3要因分散分析を行った。関連の主効果が有意で ( $F(1,30) = 4.40, p < .05$ )、「yes」反応の方が「no」反応よりも反応時間が短いことがわかった。刺激語の主効果も有意であり ( $F(2,60) = 4.83, p < .05$ )、否定語に対する反応時間が、肯定語やあいまい語よりも遅かった ( $p < .05$ )。

2次の交互作用が有意傾向であり ( $F(2,60) = 2.45, p < .10$ )、下位検定を行ったところ、肯定語での自尊感情と関連の有無による交互作用が有意であった ( $p < .05$ )。単純主効果の検定を行ったところ、高自尊感情群は肯定語に対する反応時間が「yes」反応よりも「no」反応の方が遅く ( $p < .05$ )、「no」反応では低自尊感情群よりも高自尊感情群の反応時間が遅かった ( $p < .01$ )。また、「no」反応での自尊感情と刺激語の評価による交互作用が有意で ( $p < .05$ )、高自尊感情群では刺激語の評価によって反応時間に差が見られなかったが、低自尊感情群では肯定語やあいまい語に対する反応時間よりも、否定語に対する反応時間が遅かった ( $p < .10$ )。高自尊感情群では関連の有無と刺激

表3 自尊感情高低による、刺激語の評価別の自己関連判断の「yes」反応と「no」反応の反応数

|        | yes 反応       |              |              | no 反応        |              |              |
|--------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
|        | 肯定語          | あいまい語        | 否定語          | 肯定語          | あいまい語        | 否定語          |
| 低自尊感情群 | 5.13<br>1.62 | 4.50<br>1.62 | 4.50<br>1.32 | 4.88<br>1.62 | 5.50<br>1.62 | 5.50<br>1.32 |
| 高自尊感情群 | 6.94<br>1.95 | 5.88<br>1.32 | 3.38<br>1.58 | 3.00<br>1.97 | 4.13<br>1.32 | 6.63<br>1.58 |

上段；平均値 下段；SD

語の評価による交互作用が有意であり ( $p < .05$ )、「yes」反応で肯定語やあいまい語よりも否定語に対する反応時間が遅いが ( $p < .05$ )、「no」反応では刺激語の評価による差は見られなかった。

最後に、自尊感情の高低による「yes」反応と「no」反応の反応数について、平均値とSDを算出した (表3)。低自尊感情群は「yes」反応と「no」反応の数に違いは見られないが、高自尊感情群では、肯定語とあいまい語では「yes」反応の方が多く、否定語では「no」反応の方が多かった。

## 考 察

自己関連判断での反応時間を用いて、自己についての情報判断に対する自尊感情の影響を検討したところ、自尊感情による明確な差は見出せなかった。そこで、自己評定の反応時間での自尊感情の特徴を探るという観点から、検定力は落ちるが有意傾向 ( $p < .10$ ) まで範囲を広げたところ、肯定的な特性語で自尊感情による差が見られ、「no」反応に要する時間は自尊感情の高い者の方が低い者より遅いこと、自尊感情の高い者は「no」反応の方が「yes」反応より時間がかかるが、自尊感情の低い者では反応の仕方による差は見られなかった。しかし、同じように評価的要素の強い否定語では自尊感情による差が見られなかったことから、自尊感情は肯定的な特性に対する情動的な反応と関係すると考えられる。

自尊感情の高い者は、「yes」反応に要する時間は、特性語の評価によって影響を受けて肯定的な特性の方が速いが、「no」反応では特性語の評価によって変わらない。これらのことから、自尊感情の高さは肯定的な特性に対して当てはまっていないとする判断と関係し、その判断には否定的な特性に対する判断と同程度の判断時間を要する。

特性の判断では、肯定的な情動は記述的な基準と情

動的な基準で判断することができるが、否定的な情動はさらに他の基準が加わるため (Wyer, et. al., 1999), 否定語に対する判断時間は肯定語やあいまい語に対する判断時間よりも遅くなる。肯定語に対する「no」反応が否定語に対する反応と同程度の時間を要していたことから、自尊感情の高い者にとって、肯定的な特性に当てはまっていないとする判断には、否定的な情動を喚起させる処理過程が含まれている可能性がある。

「yes」「no」の反応数を見てみると、自尊感情の低い者は評価にかかわらず、反応数が半数ずつであるのに対して、自尊感情の高い者は肯定語では「yes」反応の方が多く、否定語では「no」反応が多い。自尊感情の高い者には、自己を積極的に望ましく判断しようとする自己高揚動機が見られ、明らかに望ましい特性である肯定語に対して「当てはまらない」と反応することは、自己高揚動機に反する。そのため、否定的な情動が喚起され、反応時間が遅くなったという見方もできる。

本研究では、「yes」反応では自尊感情の高低による差が見られず、「no」反応では自尊感情の高い群の方が遅い場合もあった。これは、Campbell(1990)や Baumgardner (1990)とは一致しない。この不一致には、これらの研究では判断を「yes」反応と「no」反応と这样就可以に分けて反応時間を比較していないというだけでなく、自尊感情の文化差が関係している可能性もある。Baumeister, Tice, & Hutton (1989)は、Rosenberg (1965)の self-esteem scale を扱った研究を概観し、いずれも測定された平均値が得点の midpoint よりも高いことを示している。しかし、本研究の実験参加者の平均値は midpoint よりも低く、高自尊感情群が絶対的な基準で高い自尊感情を示しているとは言い切れない。

また、反応時間の個人差についての統制についても考慮する必要があるだろう。情動的な基準が反映しない判断として、「漢字が含まれているか」という形態判断を実施し、自尊感情による差が見られないことは確認した。しかし、それでは自己評定に要する反応から、反応時間の個人差を直接統制したとは言えない。反応時間には様々な処理過程が含まれおり、反応時間を測定しただけではそれぞれの処理を区別することは

できない。本研究では自己評定での記述的な基準と情動的な基準との差を検討するために、評価がはっきりしないあいまい語を用いたが、肯定語と同じような反応を示した。評価がはっきりしなくても、評価が含まれているために情動的な基準による処理過程が働いたのであろう。自尊感情による自己関連情報の処理過程を検討する指標として、反応時間の測定だけでは十分とは言えない。今後は、記述的な基準が働く過程と情動的な基準が働く過程に焦点をあて、これらの基準が、自己関連情報の処理に影響する過程について考える必要がある。

#### 引用文献

- Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Hutton, D. G. (1989) Self-presentational motivations and personality differences in self-esteem. *Journal of Personality*, **57**, 547-579.
- Baumgardner, A. H. (1990) To know oneself is to like oneself: Self-certainty and self-affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 1062-1072.
- Brown, J. D., Dutton, K. A. & Cook, K. E. (2001) From the top down: Self-esteem and self-evaluation. *Cognition and Emotion*, **15**, 615-631.
- Campbell, J. B. (1990) Self-esteem and clarity of the self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 538-549.
- Campbell, J. D. & Fehr. (1990) Self-esteem and perceptions of conveyed impressions; is negative affectivity associated with greater realism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 122-133.
- 遠藤由美 (1999) 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学, **39**, 2, 150-167.
- 星野 命 (1970) 感情の心理と教育 (二) 児童心理学, **24**, 1445-1477.
- Sanna, L. J., Turley-Ames, K. J., & Meier, S. (1999) Mood, self-esteem, and stimulated alternatives: Thought-Provoking affective influences on counterfactual direction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 543-558.
- Smith, S. M., & Petty, R. E. (1995) Personality moderators of mood congruency effects on cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 1097-1107.
- Rosenberg, M. (1965) *Social and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Wyer, R. S., Clore, G. L., & Isbell, L. M. (1999) Affect and information processing. *Advances in social psychology*, **31**, 1-77.